

# 日本語母語話者と タイ人日本語学習者の 出来事の描写方法に関する対照研究 ——視点表現および視座の置き方の分析を通して ラルアイソング タナパット

## ◆要旨

**同**一の出来事表現する場合でも、言語によって用いられやすい描写方法には違いが存在する。日本語学習者は文法などを理解していても描写方法にそぐわない表現を用いることが少なくない。本研究では日本語母語話者とタイ人日本語学習者の描写方法を比較するために、調査参加者に漫画を見せ、自分自身の出来事として筆記させた。視点表現の使用状況を分析した結果、日本語母語話者は「統一視座」の傾向を示していた。他方、一部のタイ人日本語学習者は「複数視座」や「視座不明示」で描写していた。この結果から、日本語母語話者は「話し手の視座」を中心に描写するのに対し、タイ人日本語学習者は「話し手の注視点」を中心に描写するという描写方法の特徴が観察された。

## ◆キーワード

視座、受動表現、授受表現、描写方法、  
タイ人日本語学習者

## ◆ABSTRACT

A preferable styles of narration are varied in different languages, even the identical situation can be narrated differently. In this study, in order to compare styles of narration between Japanese native speakers and Thai learners of Japanese, I used a comic strip as a material and assigned the writing task to both target groups. After the analysis on viewpoint expressions, it was clear that Japanese native speakers narrated mainly from the unified standpoint. On the other hand, some Thai learners of Japanese narrated from several standpoints, or did not show their standpoints in narrations at all. These results imply that Japanese native speakers are more likely to focus on "narrator's own standpoint", while Thai learners of Japanese tend to focus on "narrator's subjects of attention".

## ◆KEY WORDS

standpoints, passive expressions, benefactive expressions, styles of narration, Thai learners of Japanese

Contrastive Study on Styles of Narration  
Between Japanese Native Speakers and  
Thai Learners of Japanese  
Analysis on viewpoint expressions and standpoints  
TANAPAT RARUAISONG

## 1 はじめに

外国語の授業では、文法をはじめ、語彙、発音などを重点的に取り上げ、学習を進めている現場が多い。しかし、これらの項目を習得したとしても、学習者である話し手の発話が、聞き手に違和感を与えてしまう場合がある(水谷1985)。その要因の一つとして、話し手の話の展開の型が聞き手の期待する型に反することが考えられる(水谷1985)。

出来事の描写方法に関して、水谷(1985)は日本語と英語の話し言葉の文法を比較しながら、「事実志向型」と「立場志向型」を提唱している。事実として出来事をそのまま描写する方法を事実志向型とし、一方、話し手の立場から出来事を捉え、描写する方法を立場志向型としている。水谷(1985:24)は描写方法の傾向として「英語には事実志向が強く、日本語には立場志向が強い」と指摘し、「この二つの型の切り替えのむずかしさが、日英両語を外国語として学ぶ際の大きなつまづきとなる」と述べている。このことから、日本語学習者の場合、文法的には間違いのない文を作ることができたとしても、日本語の描写方法に気をつけなければ、違和感のある文を作ると言える。

描写方法が異なるという問題は、タイ人日本語学習者にも見られる。例えば、タイ人日本語学習者は、先生に褒められた出来事について次のように描写することがある。

(1) ?今朝、先生が褒めたよ。<sup>[註1]</sup>

上記の用例は、文法的には非文とは言い切れないが、不自然さが感じられる。しかし、タイ語ではこのような用例は文法的に正しく、一般的に用いられる<sup>[註2]</sup>。日本語では(1)のように、話し手が自分自身の出来事を客観的な事実として描写すると、不自然さが感じられる。なぜなら、話し手自身が関与しているにもかかわらず、話し手が出来事の行為に対して、どのような関係にあるかという情報が含まれていないからである(大塚1995)。つまり、話し手自身が関与している出来事であれば、次の(2)で示すように、受動表現のような視

点表現を用いて描写するほうが日本語の談話として自然であり、理解しやすい表現になる。

(2) 今朝、先生に褒められたよ。

以上のことから、同一の出来事であっても、(1)と(2)のように異なる描写方法があることが分かった。そこで、本研究では、タイ人日本語学習者の描写方法の問題点を把握するために、視点研究の観点から日本語母語話者とタイ人日本語学習者の描写方法の特徴を分析する。具体的には、8コマ漫画についてストーリー・テリング文を筆記させて、用いられている受動表現と授受表現を分析し、それぞれの使用状況を考察する。

## 2 先行研究

話し手の視点について説明するために、久野(1978)は、ある対象に対する話し手の自己同一視化を「共感」(Empathy)と称している。二人称および三人称よりも、一人称に対する共感度のほうが高いため、話し手は常に自分自身の視点をとらなければならない(久野1978)。言い換えると、話し手は自分自身以外の人物の視点から出来事を捉えると、共感度関係に違反することになる。

しかしながら、視点はあくまでも統合的な概念であり、研究者によって指しているものが異なる場合がある。本研究では、茂呂(1985)による視点の基本的な要素を取り入れ、検討を進めることにする。茂呂(1985)は児童の作文を分析するために、視点を4つの基本的な要素、すなわち「視点人物」(誰が見るのか)、「視座」(どこから見ているか)、「注視点」(どこを見ているか)、「見え」(見たこと)に細分化している。多くの視点研究の分析対象には、視座および注視点を中心に上げられている。

次に、談話における視座と注視点の位置について述べる。視座が置かれた位置は、構文の手がかりである「視点表現」に基づいて判断する。視点表現とは、話し手の心理的、物理的な位置づけであり、事象を話し手に関係づける標識である(大塚1995)。換言すれば、視点表現は談話における話し手の位置(つまり、

視座)を示すものである。そのため、視点表現を分析することによって、動作が向けられている話し手の視座を探ることができる。

その一方で、注視点は意識が向けられている対象であり、動作主に置かれることが多い(奥川2007)<sup>[註3]</sup>。しかし、視座と注視点の置き方を比較・分析している坂本(2005)や奥川(2007)は、談話の分かりにくさの要因は注視点ではなく、視座にあると指摘している。つまり、談話における話し手の注視点が移動可能なものであるのに対して、話し手の視座が移動すると、理解しやすさに支障が生じるからである。

日本語教育における視点研究は、視点表現の分析を通して、日本語母語話者と日本語学習者の視座の置き方に注目して行われてきた。共通の結果として、日本語母語話者は「統一視座」の傾向を示している(大塚1995,田代1995,奥川2007,魏2010など)。つまり、日本語母語話者は談話の主人公に視座を置いて、その視座から出来事を描写していくため、談話の流れとして理解しやすく、自然である。

一方、中国人日本語学習者(大塚1995,田代1995,奥川2007など)、台湾人日本語学習者(魏2010など)、韓国人日本語学習者(大塚1995,田代1995など)を対象とした研究では、日本語学習者の問題点として「複数視座」および「視座不明示」が報告されている。

「複数視座」とは、談話の主人公以外の人物に視座を移動させて描写することである。日本語学習者の場合、談話の主人公から視座を移動させることによって、結果的に談話の流れがまとまらず、日本語として分かりにくいと指摘されている(田代1995,奥川2007など)。また「視座不明示」とは、談話において視点表現を使用せずに描写することである。大塚(1995)や奥川(2007)では、視点表現の欠如により、談話における話し手の主観性が欠けるため、日本語として不自然であるということが明らかになった。

タイ人日本語学習者の視座の置き方を考察した研究は、サウエットアイヤラム(2008)がある。サウエットアイヤラムは、オーラル・ナレーションという手法でデータを収集し、受動表現の習得を中心に検討している。その結果、タイ人日本語学習者は、「被害の気持ちの表示」のために受動表現を使用することはできなかった(サウエットアイヤラム2008)と述べている。

以上のことから、タイ人日本語学習者は、場面に応じて視点表現を適切に使用できないため、不自然な談話を構成する可能性があるということが示唆された。しかしながら、サウエットアイヤラム(2008)は受動表現の習得を中心に分析しているため、視点研究の観点からの分析は十分になされているとは言えない。そこで本研究は、日本語母語話者とタイ人日本語学習者による視点表現および視座の置き方を分析し、両者の描写方法の特徴について明らかにすることを目的とする。

### 3 調査の概要

日本語母語話者とタイ人日本語学習者の描写方法を検討するために、本調査では視点表現を通して視座の置き方を分析する。視座の位置を判断する視点表現として、中浜・栗原(2006)は受動表現、授受表現、移動表現、主観表現などを挙げているが、本調査では、受動表現と授受表現に焦点を当てて分析する。その理由として、受動表現では動作主と対象、授受表現では与え手と受け手という二者関係が成立するからである。その二者関係から、出来事の動作の方向性を確実に判断することが可能である。また、共感の概念に基づいて、次のように課題を立てた。

課題I：自分自身の出来事として描写する際に、日本語母語話者とタイ人日本語学習者は、談話の流れにおいて視点表現をどのように使用するかを分析する

課題II：日本語母語話者とタイ人日本語学習者の描写方法の特徴を考察する

本調査では上記の課題について考察するために、漫画を用いた描写タスクを設定した。その詳細は次の通りである。

#### 3.1 調査参加者

視座がどのように置かれるかを比較するために、調査参加者として日本語母語話者とタイ人日本語学習者に分けた。日本語母語話者(以下NS)は、日本の

大学の1年生～2年生（40名）である。一方、タイ人日本語学習者（以下TL）は、タイの大学の日本語専攻2年生～4年生（40名）である。TLの場合、全員2年次に日本語文法の授業で受動表現や授受表現などの視点表現を学習済みであった<sup>[註4]</sup>。

### 3.2 題材および調査方法

本調査の題材として、文字情報のない8コマからなる自作漫画（図1）を用いた。コマ番号は各コマの左上に丸付き数字で示す。ストーリーの流れは大まかに「写真撮影」（①～④）と「カメラ破損」（⑤～⑧）という2つのエピソードに分かれる。

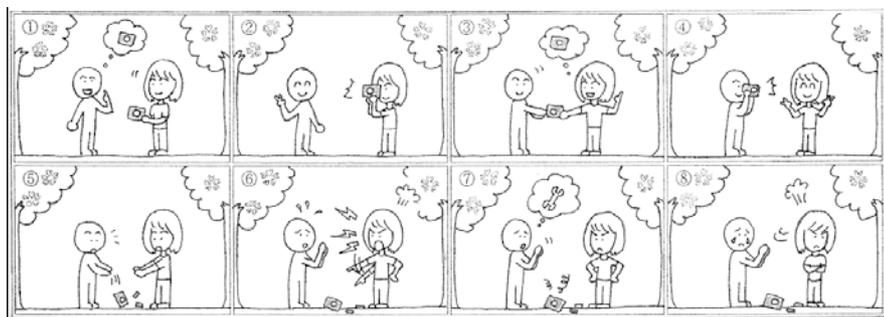


図1 8コマ漫画

本調査では、なるべく日本語として自然な談話が作れるようにするために、共感の概念に基づいて、漫画の主人公を第三者ではなく、「調査参加者自身」に設定した。漫画における「調査参加者自身」は、全てのコマの左側に配置した「丸人間」で示した。丸人間は具体的な特徴がないため、調査参加者にとって「自分自身」であることが分かりやすいと判断した。一方、全てのコマの右側に配置したのは「花子」という日本人の登場人物であり、調査参加者の友人であるという設定をした。

この8コマ漫画は、受動表現や授受表現を使用しやすい出来事で構成されている。ストーリー前半の「写真撮影」エピソードでは、丸人間が動作の受け

手・与え手になっているため、授受表現が使用されやすい。それに対して、後半の「カメラ破損」エピソードでは、丸人間が動作の対象であるため、受動表現が使用されやすい。前半も後半も視点表現が使用されやすいように設定したため、談話全体を通して視点表現の使用状況を分析することが可能である。

調査方法に関しては、次の手順にしたがって進めた。(I) 調査参加者に8コマ漫画を提示した。(II) その際に漫画の丸人間が「調査参加者自身」であること、「花子」という登場人物は友人であることを説明した。また、登場人物以外のストーリー設定は自由であると伝えた。(III) 「自分が丸人間になったつもりで、漫画を見てください」と指示して、ストーリーの流れを確認させた。(IV) 確認後「この出来事を他の友達や知人に伝えるつもりで、自分の過去の体験について一連のストーリーとして書いてください」と指示し、ストーリー・テリング文（以下、ストーリー文）を筆記させた。筆記時間は約15分とした。ストーリー文の長さは設けなかったが、全てのコマを描写するように指示した。

### 3.3 分析方法

分析方法に関しては、まず、NSとTLのストーリー文全体を通して、述語に現れる受動表現や授受表現などの視点表現を調べた。次に、ストーリー文に現れる視点表現を構文的手がかりとし、視座の位置を判断した。本調査で中心に扱う視点表現の形式および視座の位置の判断基準は表1の通りである。

表1 視点表現の形式と視座の位置

視点表現	表現形式	視座の位置
受動表現	～れる／～られる	主格（動作の対象）
授受表現	～（て）あげる	主格（動作の与え手）
	～（て）くれる	与格（動作の受け手）
	～（て）もらう	主格（動作の受け手）

視座の置き方として、同一の登場人物にのみ視座が置かれた場合は「統一視座」であると見なした。他方、複数の登場人物に視座が置かれた場合は「複数

視座」であると見なした。さらに、視点表現が観察されない、つまり、構文的手がかりがないため、視座の位置が判断できない場合は「視座不明示」であると見なした。最後に、NSとTLの受動表現と授受表現の使用状況を比較しながら、描写方法の考察を行った。

## 4 結果および考察

視点表現を通して、NSとTLのストーリー文に見られる視座の置き方を分析した結果は表2の通りである。

表2 調査参加者の視座の置き方の比較

視座の置き方	視座の位置	NS	TL
統一視座	自分自身のみ	40名 (100.00%)	28名 (70.00%)
	「花子」のみ	-	-
複数視座	自分自身と「花子」	-	9名 (22.50%)
視座不明示	構文的手がかりなし	-	3名 (7.50%)

まず、「統一視座」の場合、自分自身にのみ視座を置いたNSは40名全員(100.00%)である。それに対して、自分自身にのみ視座を置いたTLは40名中28名(70.00%)である。ただし、「花子」にのみ視座を置いた調査参加者は観察されなかった。描写タスクの設定として、調査参加者自身が関与している出来事であるため、「花子」のような自分自身以外の登場人物にのみ視座を置くことはないと考えてよいだろう。

また、談話の不自然さの要因である「複数視座」の場合を見ると、自分自身のほかに「花子」にも視座を置いたTLは40名中9名(22.50%)見られた。さらに「視座不明示」の場合、談話において視点表現を使用していないTLは3名(7.50%)である。

以上のように、談話の主人公として出来事を描写させた結果、NS全員およびTLの約7割が「統一視座」の傾向を示している。しかし、TLの約3割は「複数視座」、もしくは「視座不明示」のストーリー文を描写している。ここから、一部のTLは自分自身の出来事として捉えているにもかかわらず、自分自身に

視座を置かずに描写していることが分かった。

### 4.1 受動表現の使用状況

受動表現の使用状況を比べるために、NSとTLによるストーリー文から受動表現を抽出した。その結果、NSのストーリー文では30例、TLのストーリー文では14例の受動表現の使用が見られた(表3)。

表3 NSとTLによる受動表現の比較

エピソード	NS	TL
写真撮影 (①~④)	言われる (7)、頼まれる (6)、撮られる (1)、依頼される (1)、お願いされる (1)、聞かれる (1)、渡される (1) 小計: 18	言われる (1)、撮られる (1) 小計: 2
カメラ破損 (⑤~⑧)	怒られる (9)、責められる (2)、向かれる (1) 小計: 12	叱られる (6)、怒られる (3)、許されない (2)、「バカ」と言われる (1) 小計: 12
	合計: 30	合計: 14

(単位: 例)

漫画のストーリー前半の「写真撮影」エピソードでは、NSは受動表現を18例使用している。それに対し、TLは受動表現を2例しか使用していなかった。この結果から、「写真撮影」エピソードにおいて、NSはTLより圧倒的に受動表現を多用していることが明らかになった。以下、用例の下線部は視点表現、【 】は視座の位置、丸付き数字は視点表現が観察されたコマ番号を示す。

- (3) 花子に「自分も撮ってください。」と言われ【私】、カメラを受け取りました。(NS22/③)
- (4) 私は花子から写真を撮ってほしいと頼まれました【私】。(NS35/③)

NSのストーリー文において多く観察されたのは(3)のような「言われる」(7例)と、(4)のような「頼まれる」(6例)という受動表現である。いずれもNSは主人公として、自分自身に視座を置いて出来事を捉えている。換言すると、

受動表現を使用することによって、NSは自分自身に出来事を関係づけて、描写していることが分かる。一方、このエピソードを描写したTLのストーリー文は、次の2例の受動表現しか見られなかった。

- (5) ?私はある友達があります。彼女は花子と言われます【花子】。ある日、私はちかくのこうえんで写真を撮りたいです。(TL30/①)
- (6) \*花子さんも写真を撮られたいですから【花子】、私にたのみました。「私にも撮ってくれない?」と花子さんが言いました。(TL20/③)

以上のストーリー文の受動表現を見ると、構文的にも内容的にも問題はない。それにもかかわらず、(5)では「(花子と)いう」の代わりに「(花子と)言われる」という受動表現が用いられているため、不自然さが感じられる。なぜなら、名前や呼び方を表すのに「…という」を用いているからである(グループ・ジャマシイ1998)。つまり、受動表現ではなく、「…という」を用いて能動表現で描写するほうが適切である。また、(6)の「撮られたい」という受動表現から、TLは「花子」に視座を置いて描写していることが分かった。TL自身が主人公として関与している出来事であるため、このような「複数視座」で描写すると、談話の流れに違和感が生じてしまう。

続いて、ストーリー後半の「カメラ破損」エピソードでは、NSもTLも同様に受動表現を12例用いて、両者の用例数には差が見られない。(7)(8)はNS、(9)(10)はTLによるストーリー文である。

- (7) 私は花子さんに怒られた【私】。新しいカメラだったようです。(NS5/⑥)
- (8) しかし「たかかったのに!!弁償してよ!!!」とせめられてしまいました【私】。私は申し訳なくて謝罪しました。(NS7/⑧)
- (9) ですから、私は花子さんにしかられて【私】とてもこまります。(TL12/⑥)
- (10) 友達に怒られて【私】、しかられた【私】。(TL13/⑥)

NSの場合、最も多用されている表現は(7)のような「怒られる」(9例)である。一方、TLの場合、最も多用されている表現は(9)と(10)のような「叱られる」(6例)である。

前半のエピソードと異なり、「カメラ破損」エピソードではTLは自分自身に視座を置きながら、出来事の動作を受けた側として受動表現で描写している。結果的に、TL自身と出来事とのかかわりが明確になり、談話の流れも理解しやすい。このTLの結果は、タイ語の受動表現の意味的特徴によると考えられる。Iwasaki & Ingkaphirom (2005)はタイ語の受動表現は、被害の意味との関わりが深いため、「dàa」(叱る)、「lòk」(騙す)、「tii」(打つ)といった被害の意味をもつ動詞を伴いやすいと述べている。サウエットアイヤラム(2008)も、タイ語からの「正の転移」としてタイ人日本語学習者は被害性を感じる場面では受動表現が使用できるが、「負の転移」として被害を感じる場面以外では受動表現の使用が見られないと指摘している。日本語母語話者の談話に近づけるために、「言われる」のような被害の意味が前面に出ない動詞と受動表現を組み合わせた使用についてTLに気づかせる必要があると言えよう<sup>[注5]</sup>。

## 4.2 授受表現の使用状況

授受表現の使用状況に関して、NSのストーリー文では76例、TLのストーリー文では60例観察された(表4)。

表4 NSとTLによる授受表現の比較

エピソード	NS	TL
写真撮影 (①~④)	撮ってもらう(17)、撮ってあげる(15)、撮ってくれる(14)、受け入れてくれる(1)、返してもらう(1) 小計: 48	撮ってくれる(21)、撮ってあげる(17)、撮ってもらう(10)、見せてくれる(1)、出してくれる(1) 小計: 50
カメラ破損 (⑤~⑧)	許してくれない(22)、口をきいてくれない(3)、(話を)聞いてくれない(2)、許してもらえない(1) 小計: 28	許してくれない(6)、(話を)聞いてくれない(2)、許してくれる(1)、話してくれない(1) 小計: 10
合計	合計: 76	合計: 60

(単位: 例)

漫画のストーリー前半の「写真撮影」エピソードにおいて、NSは授受表現を48例使用している。他方、TLは授受表現を50例使用している。すなわち、両者の授受表現の用例数の差はほとんど見られない。(11)(12)はNS、(13)(14)はTLによるストーリー文である。

- (11) 写真を撮ってもらいたかったので【私】花子さんに写真を頼みました。(NS16/①)
- (12) そして、花子も桜の木の前でピースをして、私が写真を撮ってあげました【私】。(NS37/④)
- (13) 花子ちゃんはとってくれました【私】。ありがとう、花子ちゃん。(TL25/②)
- (14) 私は花子さんにしゃしんをとってあげました【私】。(TL15/④)

NSのストーリー文で多く観察されたのは(11)のような「撮ってもらおう」(17例)、(12)のような「撮ってあげる」(15例)、「撮ってくれる」(14例)である。その一方で、TLのストーリー文では(13)のような「撮ってくれる」(21例)、(14)のような「撮ってあげる」(17例)、「撮ってもらおう」(10例)が挙げられる。NSと同様に、TLも自分自身の視座から出来事を捉えており、授受表現で自分自身に出来事に関係づけている。しかし、以下の(15)で示すように「花子」の視座から描写した授受表現(7例)も観察された。

- (15) \*ともだちは私にしゃしんをとってあげました【花子】。(TL23/③)

さらに、ストーリー後半の「カメラ破損」エピソードを見ると、NSは授受表現を28例用いているのに対して、TLの授受表現が10例であった。すなわち、「カメラ破損」エピソードではNSがTLより2倍以上の授受表現を使用している。NSのストーリー文を以下のように示す。

- (16) 私は泣きながら謝っているのに花子さんは許してくれませんでした【私】。(NS5/⑧)

- (17) 「でもこんなに壊れていたらもう直すことはできない！」と花子さんの怒りは納まらず、私は許してもらえませんでした【私】。(NS1/⑧)

NSが最も多用した表現は(16)のような「許してくれない」(22例)である。これらの授受表現によって、NSは自分自身に出来事に関係づけている。他方、TLの描写した「カメラ破損」エピソードのストーリー文を示すと、(18)～(20)のようになる。

- (18) 花子ちゃんはゆるしてくれませんでした【私】。(TL31/⑧)
- (19) でも友達はとも怒っているので、私を許しませんでした。(TL2/⑧)
- (20) でも、花子さんは私のことゆるさないうです。私は泣きはじめます。(TL21/⑧)

(18)ではNSと同様に、TLも「許してくれない」(6例)という授受表現を使用している。しかし、前半のエピソードと比べると、後半の「カメラ破損」エピソードではTLによる授受表現の用例数が劇的に減少している。(19)(20)で見たように、TLは動詞「許す」を視点表現で描写していない用例も観察された。こうした「許さない」という表現のみの使用は、NSのストーリー文には観察されなかった。

以上の結果から、TLは感謝の気持ちを表すための「～てくれる」表現が使用できるにもかかわらず、期待にそぐわない場合、または不満の気持ちを表すための「～てくれない」表現の用法を理解していないということがうかがえた<sup>[註6]</sup>。TLが動詞「許す」を授受表現で描写していないことによって、「視座不明示」の描写になっている。大塚(1995)で論じられているように、談話における視点表現の欠如は客観的すぎてどこか不自然な表現になる。このことから、談話の流れ全体を理解しやすくするためには、談話が展開するにつれて、全体的に視点表現を使用していくことが必要である。

## 5 まとめ

ここまでNSとTLの視点表現の使用状況および視座の置き方を通して、それぞれの描写方法について分析してきた。その結果は以下のようにまとめられる。

課題Ⅰ：自分自身の出来事として描写する際に、日本語母語話者とタイ人日本語学習者は、談話の流れにおいて視点表現をどのように使用するかを分析する

描写タスクの結果、NS全員とTLの約7割は「統一視座」の傾向を示している。つまり、自分自身の視座を明示するために、視点表現を使用していることが明らかになった。しかし、TLの問題点として視点表現が既習であっても、被害性のない出来事に受動表現を用いていないことと、期待にそぐわない場合に「～てくれない」表現を用いていないことが分かった。また、自分自身の出来事として設定したものの、TLの約3割は視点表現を上手に運用できないため、談話において「複数視座」、もしくは「視座不明示」となり、先行研究で指摘されているように、理解しにくい日本語となっていることが分かった。

課題Ⅱ：日本語母語話者とタイ人日本語学習者の描写方法の特徴を考察する

本研究の調査結果に基づいて述べると、NSは自分自身の視座から出来事を捉えていくため、談話において「話し手の視座」を中心に描写するという特徴が見られた。これに対してTLの約7割は視座を統一しているが、談話全体ではなく、部分的にしか視点表現を使用していないことが観察された。すなわち、TLは描写する際に自分自身の視座とは関係なく、出来事の動作主を主語に立て、能動表現で描写することが多い。このことから、TLは談話において視座を明示せずに「話し手の注視点」を中心に描写するという特徴があると言えよう。

以上の分析および考察に基づき、日本語教育のために次のように提案したい。まず、両言語における描写方法の特徴を踏まえて、視点表現の構文を指導

した段階で「視座」の概念を導入し、話し手の視座の重要性、視点表現との関連性を明示的にタイ人日本語学習者に気づかせることが有効であろう。また、様々な動詞を取り上げ、視点表現との組み合わせで練習させることを提案したい。具体的には、「言われる」のような被害の意味が明らかに現れない動詞を受動表現で描写させるなどである。さらに、談話の流れをより理解しやすくするために、談話全体を通して視点表現を積極的に用いるように促すことが必要であると言える。

〈筑波大学大学院生〉

### 注

- [注1] …… 用例の文頭に来る「?」は不自然な文、「\*」は不適格な文を示す。  
[注2] …… (1)をタイ語に直訳すると「múacháao-níi ?aacaa chom」(今朝、先生が褒めた)という文になる。タイ語では自分自身の出来事を客観的に描写しても不自然ではない。  
[注3] …… ただ、渡邊(1996)は受動態の文の場合、注視点で動作の対象に置かれると述べている。  
[注4] …… 本調査の2年生のTLは全員、高等学校の日本語の授業で受動表現や授受表現を学習した者である。これらの2年生の日本語能力は、大学で日本語を学習し始めた3年生レベルに達している。本調査では3年生用の日本語文法の授業を履修している2年生を調査参加者とした。  
[注5] …… 許(2004)は実際の言語生活の中で受動表現がどのように使用されているかを解明するために、話し言葉と書き言葉の両方を取り上げて調べている。その結果、いずれも「言われる」という受動表現が最も頻繁に使用されていることが分かった。本調査の結果においても、NSは「写真撮影」エピソードで「言われる」という受動表現を最も多用している(7例)。  
[注6] …… 許・宮崎(2013)は「～てくれる」表現は感謝を表す一方、「～てくれない」表現は不満を表すと説明している。

### 参考文献

- 奥川育子(2007)「語りの談話における視点と事態把握」『筑波応用言語学研究』14, pp.31-43.  
大塚純子(1995)「中上級日本語学習者の視点表現の発達について—立場志向文を中心に」『言語文化と日本語教育』9, pp.281-292. お茶の水女子大学日本言語文化学会  
魏志珍(2010)「台湾人日本語学習者の事態描写における視点の表し方—日本語の熟達度

- との関連性」『日本語教育』144, pp.133-144.
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- サウエットアイヤラム, テーウィット (2008) 「タイ人日本語学習者の受身の習得」『言葉と文化』9, pp.187-204. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 田代ひとみ (1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる」『日本語教育』85, pp.25-37.
- 中浜優子・栗原由華 (2006) 「日本語の物語構築—視点を判断する構文の手がかりの再考」『言語文化論集』XXVII (2), pp.97-107. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 許明子 (2004) 『日本語と韓国語の受身文の対照研究』ひつじ書房
- 許明子・宮崎恵子 (2013) 『レベルアップ日本語 中級』くろしお出版
- 水谷信子 (1985) 『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版
- 茂呂雄二 (1985) 「児童の作文と視点」『日本語学』4(12), pp.51-60.
- 渡邊亜子 (1996) 『中・上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版
- Iwasaki, S. & Ingkaphirom, P. (2005) *A Reference Grammar of Thai*. New York: Cambridge University Press.